

平和文化



2013. 7 No.183



公益財団法人 広島平和文化センター
Hiroshima Peace Culture Foundation

〒730-0811 広島市中区中島町1番2号
TEL(082)241-5246(代表) FAX(082)542-7941 E-mail:p-soumu@pcf.city.hiroshima.jp
平成25年(2013年)2月/年3回発行 [URL]http://www.pcf.city.hiroshima.jp/hpcf/

NPT再検討会議準備委員会に合わせ 平和市長会議代表団がジュネーブ市を訪問



「核兵器禁止条約」の交渉開始等を求める市民署名の提出(4月24日)

平和市長会議(会長 松井一實^{かずみ}広島市長)は、今年四月、スイス・ジュネーブ市で開催されたNPT(核不拡散条

約)再検討会議第二回準備委員会に合わせ代表団を派遣し、NGOセッションでのスピーチ、準備委員会議長への「核兵器禁止条約」の交渉開始等を求める市民署名の提出等を通じ、国連や各国政府関係者等に核兵器の非人道性と「核兵器禁止条約」

の早期実現に向けた取組の必要性を訴えました。また、八月に広島で開催する第八回平和市長会議総会に先立ち、役員都市等との意見交換等を行いました。松井市長の主な用務は次のとおりです。

四月二十二日(月)

天野軍縮会議日

本政府代表部特命全権大使と面会し、NPT再検討会議第二回準備委員会において「核兵器の人的影響に関する共同声明」に日本政府として賛同してもらいたいと要請しました。後日、日本政府が賛同しなかったことを受けて、再度天野大使と面会し、遺憾の意を伝えました。

また、トカエフ

国連欧州本部長と面会し、国連から各国のリーダーに

目次

NPT再検討会議準備委員会に合わせ平和市長会議代表団がジュネーブ市を訪問/ ノルウェー・オスロで開催された市民社会フォーラムへの出席……………	1~2	平和記念資料館平成24年度第2回企画展「君を想う—あときピカがなかったら—」……………	9
本財団新理事長に小溝泰義前駐ケウェート国特命全権大使が就任……………	3	日本語教室ボランティアのためのスキルアップ講座 / ボランティア通訳者研修会……………	10
被爆体験記「無くそう争い事は」(田川康介)……………	4	「大邸の日」記念イベント「市民が海外文化を堪能」/日本語サポーター養成講座/ ボランティア通訳をしてみませんか?……………	11
第8回平和市長会議総会を開催します / 子どもたちの平和の絵コンクール / 被爆体験の継承にご協力を……………	5	留学生と市民のふれあいコンサート&交流会 / 「ひろしま留学生基金」にご協力を……………	12
中・高校生ビースクラブ「被爆ピアノコンサート」 / ロベルト・ユンク生誕100周年記念資料展 / ヒロシマ・ガイド……………	6	留学生の生活支援「防犯セミナー」 / 荒神地区町内対抗運動会に留学生が参加……………	13
広島・長崎講座「インディアナポリス大学の現地学習」 / ヒロシマ・ピースフォーラム / 新規資料の貸出開始について……………	7	「海外からの来訪者が発信するメッセージ」平成24年度平和記念資料館芳名録より/ 東日本大震災義援金について……………	14~15
追悼平和祈念館企画展「ヒロシマ復興への歩み—被爆後の混乱を生き抜く—」/ 収蔵資料の紹介「後障害—今も続く被爆者の苦しみ—」……………	8	広島平和記念資料館を全面的にリニューアル……………	16

対し、核兵器は「絶対悪」であるというメッセージを発信してもらいたいとの要請を行い、潘基文^{キム}国連事務総長に宛てた「核兵器禁止条約」の早期実現に向けた取組の推進を求める要請文を手渡ししました。

四月二十三日(火)

ベアリ赤十字国際委員会副総裁と面会し、近年、同委員会が核兵器の非人道性を訴える上で重要な役割を果たしていることに対し、被爆地として感謝の言葉を述べるとともに、協力関係を深めていくことを確認しました。

また、米国、オーストラリア等の各国政府関係者と面会した後、第八回平和市長会議総会での提案に向け、役員都市等と運営体制の充実方策について意見交換等を行いました。

四月二十四日(水)

NPT再検討会議第二回準備委員会NGOセッションに出席し、松井市長は、田上^{たうえ}長崎市長とともにスピーチを行いました。松井市長は、昨年の平和宣言の一節を引用しつつ、核兵器が非



NGOセッションにおけるスピーチ (4月24日)

人道兵器の極みであり、「絶対悪」であることを強く訴えるとともに、各国政府代表者に対し、核兵器禁止条約の交渉開始に向けたリーダーシップをとるよう要請しました。

続いて、平和市長会議二〇二〇ビジョンキャンペーン協会役員会を開催し、今後の二〇二〇ビジョンキャンペーンの行動計画等について意見交換を行いました。

また、ケイン国連軍縮担当上級代表と面会し、核兵器の非人道性に焦点を当てて核兵器を非合法化しようとする動きがある中、各国政府や関係国際機関に対する働き掛けの強化を要請しました。

パガーニ・ジュネーブ市長の

主催による平和市長会議関係者との懇親会においては、NPT再検討会議第二回準備委員会のフェルツァ議長に、「核兵器禁止条約」の交渉開始等を求める市民署名(約二十六万筆の目録と署名の一部)を提出し、同条約の早期実現に向けた尽力をお願いしました。

四月二十五日(木)

NGO団体のピースデポ等主催の「北東アジアの平和政権及び非核兵器地帯の将来」をテーマとするワークショップにおいてスピーチを行い、核兵器の非合法化に向けた世界中の市民NGOの連携を呼び掛けました。(平和連帯推進課)

ノルウェー・オスロで開催された市民社会フォーラムへの出席

核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)主催の「市民社会フォーラム」が三月二日、三日の二日間にわたり開催され、七十か国以上から四百人以上が



核兵器の使用による「壊滅的な影響」をテーマとするパネルディスカッション

参加しました。このフォーラムは三月四日、五日に開催されたノルウェー外務省主催の「核兵器の人的影響に関する国際会議」に先立ち行われたもので、(公財)広島平和文化センターからリーダー前理事長が出席しました。

フォーラムは四つのパネルディスカッションで構成され、英国王立国際問題研究所のパトリシア・ルイス氏、ノルウェー外務副大臣のグライ・ラーセン氏、核戦争防止国際医師会議(IPPNW)共同会長のアイラ・ヘルファンド氏等、各分野の専門家が、様々な観点から核兵器の使用による影響や「核兵器の人的影響に関する国際会議」が開催される意義等につ

いて発言し、議論を行いました。また、被爆地を代表して日本被団協事務局長の田中^{たなか}熙巳氏が自らの被爆体験を語り、「核兵器ほど人道に反するものはない」と訴えました。

会場では、各国から集まった学生等から構成されるボランティアが運営に携わり、若い世代が核兵器の廃絶に向け積極的に活動している姿が目立ちました。

また、会場において平和市長会議ブースを設置しパンフレット等を配布するとともに、二〇二〇ビジョンキャンペーンへの協力要請や平和市長会議への加盟要請活動等を行いました。(平和連帯推進課)



会場で活動したボランティア

本財団新理事長に 小溝泰義前駐ク ウェート国特命全 権大使が就任

本年四月一日、前駐クウェート国特命全権大使の小溝泰義氏が本財団の九代目の理事長に就任しました。

小溝理事長は就任後すぐに、四月二十二日からスイスのウィーンで開かれたNPT(核不拡散条約)再検討会議第二回準備委員会に松井広島市長とともに出席し、各国政府代表と意見交換を行う等、活発な活動を展開しています。

就任のあいさつ

このたび広島平和文化センター理事長に就任しました小溝泰義です。

平和と核兵器廃絶を目指す原点の地・広島にお招きいただいたことを光栄に思いますとともに、その重い責任を実感しています。広島は悲劇と苦闘の中から生みだされた尊い平和と非核のメッセージを世界に、また

未来世代に誤りなく伝え広めるために、広島の方々の声をよく聞き、衆知を集め、工夫し、少しでもお役に立てるよう誠心誠意努力していきたいと考えています。

広島をはじめ訪れたのは、

【略歴】
昭和二十三年生まれ。法政大学法学部卒。昭和四十五年、外務省入省。



国際原子力機関（IAEA）事務局事務局長特別補佐官（ウィーン）、条約局法規課専門官、条約局法規課法規調整官、総合外交政策局軍縮不拡散・科学部不拡散・科学原子力課国際原子力協力室長、在ウィーン国際機関日本政府代表部大使、駐クウェート国特命全権大使を経て、平成二十四年十一月退職。

二十六年前、一九八七年の夏でした。国際原子力機関（IAEA）に勤務することとなり、日本人として原子力・核不拡散の仕事をするためには、広島のことをもっとよく知るべきだと考えたからでした。その後、折あるごとに広島を訪ね、被爆者の方々、核兵器のない世界を目指して努力する方々と触れ合い、原点を確認しつつ、仕事に取り組んできました。

二〇〇〇年には、エルバラダ IAEA 事務局長（当時）が提案した IAEA 主催の広島・長崎原爆展ウィーン開催実現にお手伝いをさせていただきました。当時私は、事務局長特別補佐官として、毎日、エルバラダさんと二人きりで語り合う時間がありました。時に、直接の仕事を超え、核のない世界に向けた未来を語り合いました。核のない世界を実現するために

は、「核抑止」という相互不信と脅しに依存する安全保障に替えて、同じ人間としての信頼関係、共同体意識を基礎とした新たな「信頼できる」安全保障の枠組みを築くことが不可欠だと

というのが、エルバラダさんの考え方であり、私も同感でした。そしてこのような基礎を作る仕事には、国や国際機関だけでは不十分であり、市民社会の幅広い運動と協調が不可欠であるという認識で一致しました。

昨年十一月、四十三年近くに及ぶ公務員生活を終え、いよいよ市民社会の側から、平和と「核兵器のない世界」を実現するために、自分に何ができるかを模索し、東京、広島、長崎、アメリカ各地をめぐり歩き、多くの人々と意見交換してきました。

その中で、思いもかけず、広島平和文化センターからお招きを受け、大任にとまどいました。大切な広島はメッセージを広めるお役にたてるならば、誠心誠意努力しようと思っ

ました。グローバル化が進む中、人類としてどの国も進歩する中、人類としてのも、共同体意識は未発達で、分断化、不信、対立が目立つ残念な状況が現実です。その中で差異を紛争の原因とするのではなく、人間社会を豊かにする多様性として生かしていくためには、同じ

人間、人類としての深い絆、共同体意識を強めて行くことが重要だと思えます。想像を絶する悲劇の中から心労を重ねて生み出してきた、すべての人への広島は誰にも繰り返させないとの止むにやまれない人間の深い心情から発する尊いメッセージは、まさに今の世界の人々が厳粛な気持ちで受け止めるべき、現在から未来に向けての重要なメッセージだと思えます。

過去・現在の多くの心ある人々が血のじむ努力を重ねて築いてきた基盤を大切に、その上に未来に向けた新たな非核の波を起こすため、皆様とともに力を尽くしていきたいと心から願っています。よろしく願います。

最後に、想像を絶する苦労を重ねてこられた被爆都市・広島の皆様が、誰よりも、どこよりも、平和で、文化が躍動し、仲良く、力強く、笑顔にあふれ、思いやりのある人間精神が満ち満ちた日々を過ごしていかれま

すよう心からお祈りします。
(二〇一三年四月一日)

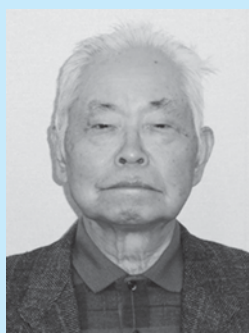
“被爆体験記”

無くそう争い事は

peace

本財団被爆体験証言者

田川 康介



プロフィール

〔たがわ やすすけ〕

1928年、旧御調郡木ノ庄村（山村）生まれ。16歳の時、学徒動員で国鉄に働き、以来38年余国鉄に勤務。退職後バスセンター、シルバー人材センターの業務に従事。現在に至る。浅学非材なれど人一倍争いを嫌う。

太平洋戦争中の少年時代

私が十五歳の時、実業学校生（広島県糸崎鉄道学校）であっても、戦争の真最中で勉強どころではななく、工場や軍事産業に動員されて働くことが学業の一環だと言われ、何をやるにも軍や警察の言う通りにさせられ、それが当たり前だと教え込まれて生活していた

ので、何の不満も感じない時代でした。十六歳の終りに広島第一機関区に動員され、十七歳になって卒業式もせぬまま、ずっと働き続け、あのいまわしい八月六日を迎えたのです。私は朝早く、広島県東部の糸崎駅で交代の乗務員として乗車し、一時間近く遅れて広島駅に着きました。機関車を交換して区に帰り、終了点検をすませて上司に報告して、平服に着替えて広場に出た時です。

地獄のさまを目の前に!!

「ピカッ」と、ものすごい閃光・熱光が西方に走り、思わず両手で顔を押しさめました。手の甲がチリチリ痛かったので、何がたか分からないうまま、東へ向かって逃げようとした時「ドカン」とものすごい爆風が来て、六メートルくらい吹き飛ばされ、散髪屋の中へ押し込まれました。頭の上からガラスや壁土が落ちて来て、どうなるだろうと不安でしたが、目の前がポーンと明るくなってきたので、散髪屋の中の人と瓦礫をかき分けて外に出ました。



広島駅（1945年10月頃）
撮影 川本 俊雄 / 提供 川本 祥雄

まず逃げる方法は、とと思い、広島駅に行ってみました。ところが駅舎は倒れ、ホームの鉄骨も曲がって、列車も脱線しているので、駄目だと分かりました。広島に家を借りていたので、どうなっているかと思ひ道へ出た時です。

西の方から逃げて来る大勢の人は、皆、裸で大やけど。皮膚が焼けただれてズルむけで垂れ下がりに、「助けてえー、痛いよう、水を下さい」。その中に赤ちゃんを背負った母親がいたのですが、赤ちゃんは半分溶けて母の背にくっついていっています。もちろん赤ちゃんは亡くなっています。とにかく皆、裸で、「水をくれ、水が欲しい」と言いながら夢遊病者の様にトボトボと西から逃げて来るのです。当時、町中には防火水槽といって、直径も高さも一メートルくらいのコンクリートの水槽が二十メートルおきにありましたが、夏ですからポウフラがウヨウヨ泳いでいました。そこへ、とにかく水を求めて、七、八人が頭を突っ込んだまま亡くなっているんです。見ていられない様です。猿猴川まで来ると、両岸にはずりりと、川の水を飲むように、そのまま亡くなった人の列です。本当に地獄とはこういうものかと、目を覆う気持ちでした。

借っていた家は火災で無く、とにかく東へ逃げようとしていた時、被災者を東へ運ぶ列車があると聞き、貨車を操車するヤードに行くと、貨物列車が七両待っていました。逃げた来た多くの人を乗せて、私も乗り、九時半に発車して、一時間余りかかって糸崎駅まで運転しました。駅前の丘の上には当時、軍事工場の大きな病院が二棟あり、皆そこへ収容されました。私はさらに東の田舎の実家に帰り、十日間、けがを治しました。その間に、台風が広島県を直撃しました。被爆の火災は消えましたが、後が大変でした。

再入市して二次被爆

私は親から「もう広島へ帰れや」と言われ、母親にむすびを四食作ってもらい、朝四時に実家を出て、台風のため山陽線がいたるところ流されているので、ほとんど歩いて広島まで帰り、着いたのは夕方の七時でした。しかし、線路が流されて列車が走れないので仕事は無いと言われ、これまた十日間くらい寝るところもない状況でした。

健康でしたが、十五年目頃、被爆性網膜症になり三カ月間苦しみました。二十五年くらい過ぎた頃、甲状腺が腫れて、それまで歌が上手だったのに声がかすめるようになり、今でも固い物がのどを通りにくくなりました。また、八十歳になった時、鼻の横にポツンと点の様なシミが出来、だんだん大きくなって小豆くらいに膨らみ、ガンだと言われて手術をしました。放射線の恐ろしさをしみじみと体感しています。

友よ、先輩・後輩の霊よ安らかに

私と一緒に家を借りていた友人は、八月六日の朝、家でぐっすり寝ていて、家の下敷きになったまま火災で亡くなり、よくしてくれた先輩も次々亡くなり、悲しい思いをしました。また、二歳若い後輩は爆心地から一・二キロメートルのところで被爆し、全身やけどで、病院で治療して二応仕事には戻りましたが、顔面がケロイドで、話すのもつらそうでした。少しずつ皮膚を削る手術を繰り返して、何とかきれいになり喜んでいましたが、四十二歳で病気で亡くなりました。これもまた、見ていてつらい思いでした。このような原爆の恐ろしさは、未来まで伝えていってほしいことであると同時に、核はゼロにして欲しいという願いが込められています。亡くなられた多くの人々の霊よ、安らかに、と祈りながら筆を置きます。

第二十七回子どもたちの平和の絵コンクール 多数の力作が 寄せられる

平成二十四年十二月十五日（土）、広島平和記念資料館メモリアルホールにおいて「子どもたちの平和の絵コンクール」の表彰式を開催しました。

このコンクールは、子どもたちの平和への意識を高めるために昭和六十一年から開催しているもので、今回で二十七回目を迎えました。広島市内の小・中学校百二十五校から三千八百三十五点、海外八カ



大賞(小学校の部)
広島市立中島小学校5年生 山本桃加さん



大賞(中学校の部)
広島市立安佐北中学校2年生 高岡巧洋さん



大賞(海外の部)
韓国 テグ市
中学2年生 ジャン ソヒさん

国(アメリカ、イラン、インド、オーストラリア、韓国、ドイツ、フランス、ロシア)の小・中学校から八百三十点、合計で四千六百六十五点の応募がありました。

表彰式には、大賞・特選受賞者のうち三十四名が出席し、賞状と記念品の楯が贈られました。表彰式終了後は、展示室(5)で大賞受賞者らによる作品展開会のテープカットを行いました。作品展は平成二十五年一月三十一日(木)まで開催し、会場には大賞作品三点、特選作品三十九点、優秀賞作品七十点、

や、広島市立大学との共催による被爆者の肖像画展も開催します。一般の方も会議の傍聴や各種展示の見学が可能ですので、皆様の御来場をお待ちしています。詳細は、平和市長会議のホームページ(<http://www.mayorsforpeace.org/jp/index.html>)を御覧ください。

第八回平和市長会議総会を開催します

世界百五十七か国・地域五千六百六十四都市(平成二十五年七月一日現在)が加盟する平和市長会議では、八月三日(土)から八月六日(火)に、四年に一度の総会を広島市で開催します。

第八回となる今回は、『核兵器のない世界』の実現を目指す

「ヒロシマ・ナガサキの心」を世界に―を基調テーマとし、核兵器廃絶に向けた今後の取組等について議論します。また、三日午後には、アンゲラ・ケイン国連軍縮担当上級代表が基調講演を行います。

その他、国内外の自治体、NGOの平和活動を紹介する展示

や、広島市立大学との共催による被爆者の肖像画展も開催します。

一般の方も会議の傍聴や各種展示の見学が可能ですので、皆様の御来場をお待ちしています。詳細は、平和市長会議のホームページ(<http://www.mayorsforpeace.org/jp/index.html>)を御覧ください。

(平和連帯推進課)



前回の開会式の様子
(第7回平和市長会議総会、於：長崎市)

被爆資料、原爆死没者の氏名遺影、被爆体験記募集 被爆体験の 継承にご協力を

広島平和記念資料館と国立広島原爆死没者追悼平和祈念館は、被爆体験を継承するための貴重な資料の収集を行っています。皆様のご協力をお願いします。

●被爆資料 — 被爆された時に身につけられていた衣服など、被爆の事実を直接ものがたる実物資料。

●氏名・遺影 — 原爆死没者の氏名・遺影(氏名のみ)の登録も可能。

●被爆体験記 — 被爆者の体験記や、遺族・友人の追悼記など。

【お問い合わせ】

●被爆資料について

広島平和記念資料館 学芸課
(082)241-4004

●氏名・遺影、体験記について
国立広島原爆死没者追悼平和祈念館
(082)543-6271

中・高校生ピースクラブ 被爆ピアノコンサート

一緒に平和のメッセージを発信しよう

平成十四年度から広島市と本財団は、平和の推進に取り組む人材育成のため、「中・高校生ピースクラブ」を開催しています。平成二十四年度は三十四人が参加し、被爆の実相を学び、長崎市の青少年との交流や他の自治体の中・高校生との平和学習会などを通じて平和の大切さを発信してきました。

平成二十四年度の活動のまとめとして、多くの人に原爆・平和に関心を持ってもらうため、被爆ピアノコンサートを企画し、一月二十七日(日)広島駅南口地下広場で開催しました。

出演者は、ピースクラブの参加者が声をかけて、コンサートの趣旨に賛同してくれた学校のクラブ仲間や友だちで、日頃の練習の成果を発表しました。また、チラ



心を込めて被爆ピアノを演奏しました

役所合唱団がゲスト出演して、会場を更に盛り上げてくださいました。来場者へのアンケートでは「自分と同年代なのにこんなにも深く平和について考えていることに感動した」「心の

(平和記念資料館 啓発課)

ロベルト・ユンク生誕 百周年記念資料展

「ヒロシマを世界に伝える」核の被害なき未来を求めて

平和記念資料館では、ロベルト・ユンク氏の資料展を、本年二月十五日から三月二十八日まで当館東館地下一階で開催しました。

ロベルト・ユンク氏は、オーストリアのジャーナリスト・作家(一九一三年～一九九四年)です。昭和三十三年(一九五七年)に初めて広島を訪問したユンク氏は、丁寧な取材で被爆者の苦しみに肉薄して、「灰燼の光」題するヒロシマ(日本語版は昭和三十六年出版)を著しました。こ



資料展のタイトル・パネル

この本は世界的なベストセラーとなりました。また、佐々木禎子さんと千羽鶴のエピソードが、この本で紹介されたことから、広く世界に知られるようになりました。平成二十五年(二〇一三年)は、ユンク氏の生誕百年にあたること

にちなみ、氏の研究者の協力を得て、原爆の脅威を訴え、ヒロシマの原爆被害を世界に伝えたユンク氏の業績を、広島との関わりを中心に紹介しました。

この資料展では、オーストリアにあるユンク氏の図書館から提供された写真をふんだんに使用したパネル十四点を展示するとともに、ユンク氏が昭和三十五年(一九六〇年)に広島で撮影したドキュメンタリー番組「灰燼の光(ドイツ、バイエルン放送局・四十五分)」を上映しました。

見学者からは、「ユンク氏の本がきっかけとなって、サダコさんのことが世界に広まったのですね。」等の感想が寄せられました。(平和記念資料館 啓発課)

観光事業従事者研修会 第十三回「ヒロシマ・ガイド」を開催

本財団は、三月八日(金)に第十三回「ヒロシマ・ガイド」を開催しました。

この事業は、広島平和記念資料館や平和記念公園などを案内するバスガイドや観光タクシードライバー等観光事業従事者の方を対象として、広島への来訪者に被爆の実相や核

(平和記念資料館 啓発課)



ヒロシマピース ボランティアから、広島平和記念資料館内の案内を受ける研修会参加者

兵器廃絶と世界恒久平和を願う「ヒロシマの心」を正しく伝えてもらうため、学習の機会を提供するもので、広島県内の七社三十七人の参加がありました。平成十三年度から開催し、今回で十三回目となります。

研修では、ヒロシマピース ボランティアによる広島平和記念資料館内や平和記念公園内の案内を受けました。続いて、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館を訪れ、同館職員による館内の説明を受けた後、朗読ボランティアによる被爆体験記の朗読、本財団の被爆体験証言者 松本都美子さんの被爆体験講話を聞きました。

終了後、参加者からは「親切な説明で大変勉強になった」「何度も参加して多くの知識を習得したい」「資料を読むだけではわからないポイントを学ぶことができた」「被爆体験講話が聴けてよかった、心を打たれた」などの感想が寄せられました。

広島・長崎講座 アメリカインディアナ ポリス大学の現地学習

五月十二日(日)から五月十七日(金)まで、米国・インディアナポリス大学が、今回で三回目となる広島での現地学習を実施しました。この現地学習は、「広島・長崎講座」に認定された講座、「ヒロシマ・ピース・スタディ」の一環で、学生十二名と教員二名の一行十四名が参加し、日本文化に触れるとともに平和問題について学びました。

一行は、広島平和記念資料館などを見学し、被爆体験講話の聴講や国立広島原爆死没者追悼平和祈念館での原爆詩の朗読会、放射線影響研究所及び広島平和研究所での講義などを通して被爆の実相について理解を深めました。



学生が製作した「広島・長崎講座」広報ポスター

した。参加した学生は、帰国後、学習の成果を今後に生かすための取組を計画しており、そのうちのひとつとして、「広島・長崎講座」広報用ポスターを製作し、広島平和文化センター及び長崎市に提供しました。

(平和連帯推進課)

ヒロシマ・ピース フォーラムの開講

市民の方が、平和や原爆について学び、どのように行動していけばよいかを探究する機会を提供するための連続講座「ヒロシマ・ピースフォーラム」が、五月十一日(土)に開講しました。広島市立大学「広島からの平和学」との連携講座で、七月二十日(土)までの隔週土曜日に全六回開催されます。広島市立大学の学生と、公募した一般市民の合計約百二十名は、原爆被害の実相や核兵器廃絶に向けた様々な取組等について、実体験・行政・歴史・医学・芸術・メディアといった多岐に渡る分野の講演を聴講し、グループディスカッションで意見交換を

行います。第一回では、広島平和文化センターの小溝理事長が、開講式での挨拶に続いて「平和文化創造に向けたヒロシマのメッセージ」と題して講演を行いました。講演の中で理事長は、「あのような悲惨な思いは他の誰にもさせてはならない」というヒロシマのメッセージは、言葉で表現できないほどの悲劇の中からもがき抜いて紡ぎ出した、何人も平和に生きる権利があるという普遍的な平和の訴え」であるとし、「世界が相互理解と共同体意識による新しい安全保障へと移行できるよう、将来を担う世代の方々と共に取り組んでいきたい」と話しました。

続いて被爆体験講話では、広



ピースフォーラムで講演する小溝理事長

行います。

第一回では、広島平和文化センターの小溝理事長が、開講式

での挨拶に続いて「平和文化創造に向けたヒロシマのメッセージ」と題して講演を行いました。講演の中で理事長は、「あのような悲惨な思いは他の誰にもさせてはならない」というヒロシマのメッセージは、言葉で表現できないほどの悲劇の中からもがき抜いて紡ぎ出した、何人も平和に生きる権利があるという普遍的な平和の訴え」であるとし、「世界が相互理解と共同体意識による新しい安全保障へと移行できるよう、将来を担う世代の方々と共に取り組んでいきたい」と話しました。

続いて被爆体験講話では、広

新規資料の貸出 開始について

平和記念資料館では、原爆展の開催や平和学習に活用できるポスター・パネルや映像資料、被爆資料等を貸出しています。

このたび新たに、NHKから寄贈を受けた「伝え続けたいヒバクシャからの手紙」朗読CDの貸出を開始しました。

「伝え続けたい ヒバクシャからの手紙」は、広島・長崎の被爆者が被爆体験やその後の人生、亡くなった家族への思い等を自らつづった手紙を、NHKアナウンサーとキャスターが朗

読した五分間のラジオ番組です。このたび貸出を開始したCDには平成二十三年九月から同年十二月にかけて放送された番組十七回分が収録されています。CDは二枚組で、朗読シナリオ集がセットになっています。ぜひご利用ください。

【申込方法】

電話でお申し込みください。貸出期間は、個人・学校は二週間、展示会での使用は一か月までです。送料は往復とも申込者の負担となります。

☎(0882)541-5544

(受付時間 午前九時～午後五時)

(平和記念資料館 啓発課)

島平和文化センター被爆体験証言者の植田短子さんが当時の生活の様子を交えながら体験を話され、「たくさん話を聞いて歴史を学び、戦争をしない世の中を作って欲しい」と語り掛けました。

参加者からのアンケートでは、「小溝理事長は『若い世代』という言葉は何度もおっしゃっていて、これから生きていく私たちの動きが大切だということを感じた」といった感想が寄せられました。

(平和連帯推進課)

平成25年 追悼平和祈念館企画展

ヒロシマ復興への歩み —被爆後の混乱を生き抜く—

- 期間 平成25年1月1日～12月28日
- 場所 追悼平和祈念館
地下1階 情報展示コーナー
- 入場 無料

中から、堀本春野さんと浜井信三さんの体験記(抜粋)をご紹介します。

広島電鉄家政女学校で勉強しながら路面電車の車掌をしていた堀本さんは、原爆投下の三日後に復旧した一番電車の車掌を務めました。

：先生が「今日から市内電車が運行するので、誰か乗務して下さい」と言われました。専攻科の人の殆どの中で、二年生の電車勤務だった私が行く事になりました。「斐(こい)の宮島線の話所に行き、顔も知らない会社の人からキップも釣銭もない鞆を手渡され「お金のない人からは電車賃をもらわなくても、ええ」と言ってくれました。(中略)

乗客は無口な人が多く、「おれ電車が動くんか」と驚かれる人。「鉄橋が怖いけん」と有難がる人。「火傷の人、斑点が見える人」色々でした。「有り難うございました」「済みません」と言い、電車賃の払えない人も多かったように思います。車内はもんぺやゲートルを巻き、救急袋や綿入れの防空頭巾、風

呂敷包を持つ人は良い方で、手ぶらの人が多かった様に思います。身内の方を捜しにいくらしき人も有り、お客は少なかつたとは言えない状態でした。…

浜井さんは、広島市職員として、後には広島市長として、食糧難、資金難、資材難の中、多くの復興事業に取り組みました。

：住宅難もまた大へんなものであった。防空壕を住まいとしているものは、まだいい方で、鶏小屋に寝起きしているものさえあった。(中略)

こういう住宅事情を見て、木原市長は市費で応急市民住宅を建てていくことを決意した。一戸でも多く建てるために、工費を節約して、最小限度の家をできるだけ多く建てるようにと命じた。いまも基町にある十軒長屋のブラック二十棟が、二十一年の九月に建ったそのときの応急住宅である。これができあがったときは、申し込みが殺到して、入居者を決めるのに、大へん困ったことを覚えている。…

昭和二十年八月六日、一発の原子爆弾により広島島の街は一瞬にして破壊され、多くの尊い生命が無差別に奪われました。原爆で家族を失い、自らも傷ついた人々は、食糧や物資の不足に苦しめられ、放射線の後障害におびえながらも生活再建へと歩み始めました。今回、展示している被爆体験記の



堀本春野氏作(市民が描いた原爆の絵)

体験記の続きは、館内の企画展会場と体験記閲覧室で読むことができます。また、当館のホームページ(<http://www.hiro-tsuikinakan.go.jp/notice/info.php?id=156&from=list>)にも体験記を掲載しています。

「収蔵資料の紹介」コーナーでは、平和記念資料館で収蔵している約二万二千点の資料の中から、テーマを定め、数点ずつを展示しています。一九四五年(昭和二十年)八月六日、一発の原子爆弾により、一瞬にして多くの命が奪われました。さらに、救援や捜索のために爆発後

「収蔵資料の紹介」コーナー 今回のテーマは、後障害 —今も続く被爆者の苦しみ—

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館
☎(082)543-6271

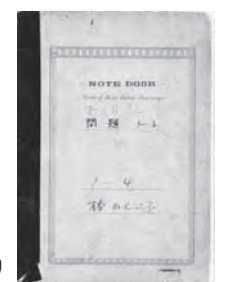
【お問い合わせ】
広島平和記念資料館 学芸課
☎(082)241-4004

【お問い合わせ】
平和記念資料館 学芸課
☎(082)241-4004



かじやま 楮山ヒロ子さんの日記より
(被爆時1歳 享年16歳)

モモの所に段々花のように紫色をして、点々として、あとがある。自分の顔色が青かった。それはこのごろになって目立ってきた。自分に死が来るような気がした。



広島平和記念資料館
平成24年度第2回企画展
おも
君を想う
—あのとときピカがなかったら—
■期間 7月15日(月)まで
■会場 平和記念資料館
 東館地下1階展示室(5)

■あの日

一九四五年(昭和二十年)八月六日。広島市内中心部では、空襲による火災の延焼を防ぎ、避難場所を確保するため、大がかりな建物の取り壊し作業が行われていました。

原爆により、広島は全市が壊滅大火災となり、市内は大混乱に陥りました。負傷して血だるまになった人々は、襲いかかる火災の中から郊外へと、命からがら逃げました。

広島市郊外へ逃げた人々は、軍のトラックや車で送られた負傷者も含め約十五万人にのぼり、宇品港は瀬戸内海の島々に親戚を頼って逃げる人々でごったがえしました。避難してきた人々の受け入れ先も救護活動に追われ、大混乱になりました。

比較的被害が少なかった陸軍船舶司令部所属部隊(通称「晩部隊」)を中心に、近郊からも含め、軍関係者や、警察官、医師たちが被災者の救出、応急手当、輸送、死体の収容、市民への炊き出しなどを行いました。

かろうじて火災を免れた病院や広島市周辺部の医療機関、各地に急設された臨時救護所は、ごも負傷者であふれました。救護所には負傷者が絶え間なく運び込まれ、肉親を呼ぶ声、助けを求める声が一晩中続きました。

■君を想う

「娘に一目会いたい」「弟を孤児にしてはならない」被災した人々は家族を想い、その気持ちは傷ついた体を動かしました。

「お父さん、待って」「お母さんには坊やがいるでしょう」「耐えがたい苦しみのなかで、最期まで想い続けたのは大切な家族のことでした。



娘に一目会いたい
田川アサヨさん(当時23歳)は雑魚場町で被爆し、全身にやけどを負いました。アサヨさんは実家に預けていた娘の身を案じ、必死で帰り、娘さんの無事な姿を確認し、翌7日に亡くなりました。寄贈/田川松代氏

■私はいかに

被爆から日が経つにつれ、焼け跡には、帰ってこない親族や知人を捜しに行く人々が増えていきました。傷つき、変わり果てた姿でも家族の強い思いが互いを引き寄せ合うの

でしょうか。「私はここにいる」。混乱の中でも奇跡のような出会いがありました。

■行方がわからないまま

毎日毎日、必死になって肉親や知人を捜し回っても行方がわからず、遺骨を持ち帰ることさえできない人々もいました。戻ってこない家族の消息を確認できない現実を受け止めようとしつつも、あきらめきれない気持ちを抱え、人々は焼け跡や自宅に残された持ち物を大切に保管してきました。

■ピカがすべてを変えた

原爆は、多くの人々の命を奪っただけではなく、残された人々の生活も変えました。

生き残った人々は、精神的・身体的な苦痛だけでなく、一家の大黒柱を失ったり、原爆で障害を負ったため働けないなどの理由から、経済的な問題も抱えるようになりました。ピカにあったことを忘れようにも忘れられない、常に被爆した事実に向き合わざるをえない過酷な生活を強いられたのです。

○原爆供養塔

一九四六年(昭和二十一年)一月、被爆直後に市内各地で仮埋葬された人々の遺骨を収容し供養するたため、「広島市戦災死没者供養会」が

設立されました。同年五月、慈徳寺鼻に戦災死没者供養塔が、同年七月には納骨堂・礼拝堂が、市民の寄付によって建てられました。そして、一九五五年(昭和三十年)七月には、平和記念公園の西北隅に、既存のものに代わり現在の原爆供養塔が建てられました。

広島市内の復興に伴い、道路や家屋工事現場などから見つかった被爆者の遺骨は供養塔に集められ、供養塔内部には数万の犠牲者の遺骨が納められています。

「あのとときピカがなかったら」。原爆が投下されなければ多くの人が悲惨な死を迎えることも、生き残った人々がつらく悲しい記憶を背負って生きていくこともなかったはず。

あの日、大切な家族を失った人々が経験したこと、そして絶望のなかで悩み苦しんだ日々は、私たちの想像が及ばないほど壮絶なものでしょう。

「他の誰にもこんな思いをさせてはならない」。原爆による被害者たちの想いをつなぐため、私たちができることは何でしょうか。あらためて考えてみませんか。

【お問い合わせ】

平和記念資料館 学芸課まで
☎(082)241-4004

「日本語教室ボランティアのためのスキルアップ講座」の開催

広島市内では、約二十の外国人市民のための日本語教室が、ボランティアグループにより運営されています。これらの日本語教室を支援する目的で、研修会を全三回開催しました。

一月二十日(日)、第一回目では、NPO法人多文化共生リソースセンター東海の代表理事である土井佳彦(とひよしひこ)さん(とひよしひこ)に、災害時における外国人市民支援についてお話しいただきました。東日本大震災の経緯談や具体的な事例を紹介していただきましたながら、災害時に実際どのような外国人支援が必要となるのかということについて、教えていただきました。

続いて一月二十七日(日)、第二回目では、広島市立大学国際学部准教授の岩田一成(いわただかずなり)さん(いわただかずなり)に、災害時の「やさしい日本語」について、ワークショップを取り入れ、実際にやさしい日本語に置き換える練習を交えながら、



研修会でのワークショップの様子

ご講義いただきました。具体的には、「避難してください」は「逃げてください」に置き換えるなど、大変参考になりました。二月十日(日)、第三回目では、呉市日本語教室ボランティアの伊藤美智代(いとうみちよ)さん(いとうみちよ)に、孤立しがちな外国人市民の社会参加を促す活動について、ワークショップを交えながら教えていただきました。この教室には、技能習得のため来日する研修生が多いということですので、この教室の学習者の于鵬(よっぺん)さん(よっぺん)、グリッターメイト・ギットさん、ヒエップ・ズン・ヴァさんより、実際の日本語教室での体験を紹介していただきました。

日本語ボランティアとして活動している参加者からは、「今

後の活動に活かしたい」、「具体的な事例が参考になった」、「他の教室の活動を知る良い機会となった」、「ネットワークの大切さを感じた」などの感想が寄せられ、日本語ボランティアに関心のある参加者からは、「自分にも協力できそうなことがありそうな気がした」、「ボランティア活動についてもっと勉強したいと思った」などの感想が寄せられました。

(国際交流・協力課)

「ボランティア通訳者研修会」の開催

当財団では、平成十九年度より、行政機関の窓口や学校等に当財団に登録しているボランティア通訳者を派遣し、日本語での会話が困難な外国人市民への支援を行っています。そこで、多岐(たき)に渡る通訳に対応する人材を育成するため、登録者や一般市民を対象に、多文化共生の知識や語学能力の向上等を目的とした研修会を、全五回開催しました。

第一回目、二月二十三日(土)

には、広島市の担当者が、広島市の多文化共生の取り組みと現状について、また、当財団の担当者が、外国人市民生活相談コーナーの相談内容の事例の紹介や、ボランティア通訳者派遣制度の概略を説明しました。その後、ボランティア通訳登録者の向田秀雄(むかひひでお)さん(むかひひでお)が、派遣の体験談や自身の国際交流協力活動について、映像を利用して話をしました。

続いて第二回目、三月二日(土)には、(財)自治体国際化協会地域国際化推進アドバイザーの榎井縁(えのいゆかり)さん(えのいゆかり)が、全国的な視野で、在住外国人の現在置かれている状況及び支援の必要性などについて、データや映像を使用して解りやすく講義しました。

第三回目、三月九日(土)には、平和のためのヒロシマ通訳者グループ(HIP)の協力を得て、実際に英語で平和記念公園を案内する場面を想定したフィールドワークを、二つのグループに別れて行いました。

第四回目、三月十六日(土)と第五回目、三月二十三日(土)には、専門の通訳者を講師に招

き、英語と中国語とスペイン語のグループに分かれ、語学習得の有効な方法、ロールプレイング、ボランティア通訳派遣事例に沿った講義などの語学研修を行いました。

全五回の研修会には、延べ二百二十五名の参加者があり、「広島市の現状や、さらに日本全国、世界の外国人の状況を把握することができた」、「通訳ボランティアの体験談はとても興味深かった」、「語学研修は、実際に役に立つ内容で、学習方法の指摘により、さらに努力していこうと刺激になった。」などの感想が寄せられ、参加者は、各自の能力及び知識を高めました。

(国際交流・協力課)



平和記念公園フィールドワークの様子

「姉妹友好都市の日」記念イベント 市民が海外文化を堪能

広島市は、海外に六ある姉妹・友好都市ごとに「姉妹・友好都市の日」を設けて記念イベントを開催しています。イベントの進行役は公募等で選ばれたヒロシマ・メッセンジャーの方が務めました。

大邱の日

五月三日(金)から五日(日)まで、

ひろしまフラワーフェスティバル各会場で「大邱の日」記念イベントを開催しました。

主催「平成二十五年度大邱の日実行委員会」(全三十二団体)

三日(金)は、ステーションで、朝鮮通信使図書交換式再現の後、記念セレモニーを行い、大邱の日実行委員長 広島市長、大邱広域市長、駐広島大韓民国総領事館総領事が「友情の和を拡げよう」と挨拶されました。文化・芸術の紹介は、ソウル中央大学 打楽団、在日本大韓国民団青年会 広島県本部、大邱シミン高等学校吹奏楽団、インカント・ソリスト・ア



大邱広域市芸術団の演奏

ンサンブルが演奏を行い、来場者を魅了しました。また、三日間を通じ、「韓国・大邱

また、三日間を通じ、「韓国・大邱

マダン(ひろば)」を設け、「大邱広域市・韓国紹介」「韓服(チマチョゴリ)を着て記念撮影」「韓国家庭料理の販売」各コーナーは、家族連れや若い女性を中心に多くの方で賑わい、韓国の文化を堪能していました。その他、平和記念資料館本館ヒロティに、大邱広域市から贈られた大邱大太鼓の特設会場を設け、大太鼓の演奏や子どもたちによる打ち鳴らし体験を行いました。期間中、約七千七百人の来場者があり、催しは大変盛況のうちに終わりました。(国際交流・協力課)

平成二十五年度 日本語サポーター養成講座 留学生の自立を めざして



留学生の発表を聞く参加者

広島市留学生会館では、平成二十二年度に日本語サポーター養成講座を始めて以来、毎年予想を大幅に上回る申し込みをいただてきました。今年度も募集人数を上回る申し込みがあり、改めてこの講座への関心の高さを感しました。

養成講座では、講師から「生活の中の日本語」「日本語能力試験とは」「やさしい日本語の作り方」という項目で説明を受け、その後グループに分かれて、やさしい日本語での会話を実践しました。参加者達は、講師から、相手の「話したい！」を引き出すことにポイントを置くようアドバイスを受けながら、それぞれ楽しみながら学習していま

した。

今年度の講座では、現在活動をしているサポーターと留学生のペアが日頃の活動内容について発表しました。留学生は、サポーターと一緒にスピーチコンテストの練習をして賞を受賞したことや、サポーターの存在が日本での生活に溶け込む大きな助けになったことなどを発表してくれました。サポーターからは、お互い無理のないスケジュールと内容で、出来る範囲のことをするのが長続きのコツであるとの発表がありました。参加者からは「実際に留学生から感想を聞くことができ、サポーターの意欲がますます湧いた」「留学生とどのように接すれば良いか参考に

なった」と具体的なイメージが湧いたようで大好評でした。その後の報告会では、現役サポーターの活動を聞こうと、数名の養成講座参加者が残り、サポーターの報告に聞き入っていました。就職活動中の留学生を献身的に支えたエピソードなど、留学生とサポーターの心の絆の深さを感じさせる報告が相次ぎました。最後に講師から「相手が自立するサポートを心がけましょう」というアドバイスがありました。

留学生生活をより充実したものにすため、サポーター制度をさらにニーズに応えるものにしていきたいと思えます。

(広島市留学生会館)

ボランティア通訳を してみませんか？

現在日本国内には約二百十五万人が、私たちの住む広島市には一万七千人近い外国人が暮らし、市民の約七十人に一人は外国人という状況になっています。しかしながら、新しく市民として加わる仲間の中には、様々な事情で日本語が話せないまま来日する人も多く、日常生活では戸惑うことばかりです。特に学校に転入する子どもたちは不安でいっぱいです。

こういった方々を支援するだけでなく、お互いの文化の違いを認め合い、同じ「市民」として地域を支え合う関係を築いていこうという考え方が「多文化共生」です。

あなたの語学力を活かし、通訳を通じて多文化共生社会を実現しませんか！

お知り合いの方のご紹介も大歓迎です！

詳しくはこちらのウェブサイトをご覧ください。(http://www.pcf.city.hiroshima.jp/ircd/volunteer/gogaku.html)

留学生と市民のふれあいコンサート&交流会

二月二十三日(土)と五月二十五日(土)の午後二時より、広島市留学生会館二階ホールにおいて「留学生と市民のふれあいコンサート&交流会」を開催しました。

二月の「冬のコンサート」の第一部は、「雅楽(和)と西洋音楽(洋)のコラボレーション」がテーマでした。ゲストに元ジャズシンガー木本いず美さんと雅楽奏者二人のグループ「YAMATO」をお迎えし、笙と箏の伴奏で「星に願いを」、「愛燦々」などの曲が披露され、木本さんの雅やかな扇と着物姿に、留学生はみんなうっとりとしていました。



YAMATOの雅やかなステージ

五月のコンサートは、新入居者に歓迎の意を表わすためのイベントの一つでした。コンサートでは、最初に、当会館で琴を習っている四人の中国人留学生が「涙そうそう」などの曲を浴衣姿で演奏しました。その後、エリザベト音楽大学大学院の中国人留学生がクラシック曲のギター演奏をしたほか、タイと中国人の留学生がジャズやタイルのポピュラー曲を歌いました。交流会では、留学生の参加者が大変多く(十四か国、四十八人)、テーブルごとに留学生が自己紹介をする時間を設けました。ここでは、各自の勉強内容などを積極的に説明していました。カンボジアのスイーツ(バナナ&スイートバジル入りココナツミルク)やブラジルコーヒーを味わいながら、楽しく歓談しました。

第二部の交流会では、留学生がマイクを持ち、一人ずつ日本語で自己紹介をしました。その後、ティータイムとなりましたが、前日に留学生と市民ボランティアと一緒に作ったティアが一緒に作った美味しいクッキーとお茶が好評でした。歓談後、ナイジェリアの留学生が、映像や写真を使って母国のことを日本語で紹介しました。最後に、インドネシア留学生二人が、伝統衣装に身を包み、民族舞踊を披露しました。

「雅楽の演奏は日本でもなかなか生で聴く機会がないので感動した」とか「馴染みの無い国に触れることが出て来た良かった。」という声を参加者の多くから頂きました。

その後、ルーマニアの留学生

が、流ちょうな日本語で、日本との共通点を挙げながら母国の紹介をしました。交流会の最後は、ネパールの民族舞踊で締めくくりました。

「留学生と友人になった。」「タイ語で名前の書き方を教わった。」「皆の一生懸命さに感動した。」などという声が参加者から寄せられました。

両コンサート・交流会には、約百七十名に及ぶ留学生・外国人・市民の皆さんが参加し、音楽を通じて楽しい交流が生まれました。

(広島市留学生会館)



ルーマニアからの留学生が母国を紹介

「ひろしま留学生基金」にご協力を

本財団では外国人私費留学生支援のため、皆様から寄せられた寄付金を「ひろしま留学生基金」として積み立て、その利息により「ひろしま奨学金」を支給しています。しかし、昨今の金利低下により、財源は大変厳しい状態となっています。「ひろしま留学生基金」への皆様の温かいご支援をお待ちしております。

基金へのご寄附に関するお問い合わせは

(公財) 広島平和文化センター
国際部留学生会館
〒732-0806
広島市南区西荒神町一番一号
☎(082)5688・5993-1

「ひろしま奨学金」とは

広島市内の大学・大学院に在学し、かつ広島市内に居住する外国人私費留学生を対象に、昭和六十三年六月から毎年、約三十人に月額三万円を支給しています。

平成二十五年防犯セミナー 安全な留学生生活 のために



熱心に講座を受ける留学生達

広島市留学生会館では、毎年春に、留学生の生活支援の一環として、防犯セミナーを開催しています。今年度も、広島県広島東警察署から講師を招き、来日したばかりの留学生を中心に十二か国・三十九名の居住者が、交通ルール、盗難・ひったくりの防止策を学習し、護身術を体験しました。

多くの留学生は市内を自転車で移動しているので、交通ルールを知ることは大変重要です。セミナーでは、交通ルールに関するビデオを見た後、講師が雨天の場合の自転車走行を実演したり、標識について説明するなど、分かりやすい指導をしてくださいました。また、日本は安全な国だというイメージを持っている留学生が少なくないので、常に「自分の身は自分で守る」という意識を持って行動することの大切さを再認識しました。

護身術の体験では、留学生がペアになり、講師のお手本を見ながら実際に体を動かしました。最初は恥ずかしがっていた女子学生もいましたが、次第に慣れて、何度も練習をしてお互いの動作を確かめ合っていました。男子学生も積極的に練習をしていました。留学生からは、「今まで知らなかったルールを知ることが出来て大変勉強になった。」「広島で安全に生活していけそうだ。」「自分の国でも同じように役に立つ内容だったので、実践したい。」「などの感想がありました。」

また、留学生が積極的に講師に質問をしたり話しかけたりして交流も深まり、楽しく有益なセミナーになりました。講師が剣道をしてもらえることもあり、このセミナーでの会話をきっかけに東警察署に剣道の見学に行くことと決定しました。ご配慮に大変感謝しています。

留学生と地域とのふれあい事業 荒神地区町内対抗 大運動会に参加

(広島市留学生会館)

広島市留学生会館では、地元住民との相互理解・交流を深め、留学生が地域の一員として暮らせるように、荒神地区での行事に積極的に参加しています。今年度最初のふれあい事業として、五月二十六日(日)「荒神地区町内対抗大運動会」が、留学生会館近隣の広島市立荒神町小学校運動場で開催されました。主催は荒神地区社会福祉協議会です。



入場行進する留学生達

午前九時から開会式が行われ、町の旗を持って入場行進を行いました。準備体操のラジオ体操には戸惑っていましたが、競技が始まると、二人三脚や玉入れ、綱引き、ボールゲーム、飴食い競争、ラムネ飲み競争等娯楽性のある種目に積極的に参加し、地域の人達と楽しく交流していました。最後は町内対抗リレーで、大きな声援の中、留学生も懸命に走っていました。各種目に参加するごとに、洗剤、ほうき、ティッシュペーパー等の生活用品が参加賞として配られ、留学生達は喜んでいました。

館して以来、毎年この運動会に参加しており、今では地域の皆さんも留学生の参加を恒例のものとして受け止めています。単に参加するだけでなく、大会役員の役割も割り振られ、集合係や競技用具の準備、片付けなどの進行係として、運営に一役買い、頼りにされています。また、午前七時からの会場設営作業に六人の留学生が参加しました。地域の皆さんの広島弁の指示に戸惑うこともありましたが、見様見まねでテントや椅子の設営、景品の仕分け作業を行いました。運動会終了後の片付け作業は、参加した留学生の殆どが手伝い、地域の皆さんに大いに感謝されました。

行事への参加の効果として、普段話す機会が少ない留学生同士との交流が行われることも見逃せません。異なる国の留学生が一緒に競技を楽しんだり、お互いに声援を送ったり、また、一つのテントの下で一緒に昼食の弁当を食べることを通して親しくなりました。留学生会館では、今後も地域の皆さんと交流できる催しに、留学生が積極的に参加できるように応援したいと思います。

(広島市留学生会館)

平成24年度 海外からの来訪者が 発信するメッセージ

—広島平和記念資料館芳名録より—

ツエツカ・ツァチエヴァ
ブルガリア共和国国民議会議長
議員は、広島原爆のあまたの死没者に対し、哀悼と敬意を表します。廃虚からみごとに近代的美しい我が町を復興させた、広島市民の勇氣と精神的な力に頭が下がる思いです。
広島が永遠に平和でありますように！
戦争が二度と繰り返されませんように！
人類が平和な世界でいつまで

も暮らせますように！

(二〇一二年四月十二日)



アンナ・セマンバ・マキンダ

タンザニア連合共和国国民議会議長

アンナ・セマンバ・マキンダ議長率いる我々タンザニア連合共和国国民議会一行は、国家が他の国家に対して原爆を使用しようとするいかなる試みも強く非難します。全ての国家と国民には平和が必要です。
一九四五年八月に起こった出来事を我々に思い起こさせ続けるためにこの資料館を運営してください。感謝します。

します。

平和のうちに共存していこうではありませんか。
(二〇一二年五月十六日)



イジリオ・コエーリヨ

東ティモール民主共和国駐日特命全権大使



私たちが健康で平和な生活を営めるよう、核兵器のない世界になりますように。
(二〇一二年七月十八日)

クリフトン・トルーマン・ダニエル
トルーマン米大統領の孫
私たちは記憶しなければなら
ない。
死者を悼むために。
生存者を尊ぶために。
そして、二度と再び起こさ
てはならない。
(二〇一二年八月四日)

(リーダー士の孫)
決して忘れてはならない。が
んばって
(二〇一二年八月四日)



アマヌ・タンブワール・ワジリ
ナイジェリア連邦共和国国民議
会下院議長

代表団として、今後、私たちは世界平和を唱道し続けること
でしょう。世界平和は、相互理
解の深化と人類社会の発展を促
進するのです。
一九四五年八月六日の不幸な
悲劇により犠牲となった方々の
ご冥福をお祈りします。
(二〇一二年十月二十五日)

アリ・ビーザー
ヒロシマ・ナガサキでB29に搭
乗したジェイコブ・ビーザー氏





ケネス・マレンデ
ケニア共和国国民議会議長
広島市を訪問し、良い思い出となりました。
ヒロシマは、冷酷な人間の愚



かさにより破壊されたのです。
犠牲者の魂が永遠に安らかに
眠らんことを。
(二〇一二年十月三十日)

グラント・ポゴシヤン

駐日アルメニア共和国大使

広島で起こったことは、日本
の人々のみならず、全人類の悲
劇です。

これを記憶し、共有し、若い
世代に事実を伝えることにより、
この小さな地球でより平和な世
界を築くことができるでしょう。
ありがとうございます。
(二〇一二年十二月三日)



アハメド・カリール

駐日モルディブ共和国大使

核兵器は世界から完全に廃絶
されるべきです。
人類は被爆された広島の人々
と同じ運命にあうことを容認し
てはなりません。

モルディブ国民は常に広島及
び日本の人々と共にあります。
(二〇一二年十二月三日)



昨年度の広島平和記念資
料館芳名録より、本年六月
二十七日時点で掲載許可が
得られたものを抜粋してい
ます。

(総務課)

**東日本大震災
義援金について**

本財団にお寄せいただいた義援金
は、累計百二十三万九百七十八円
(本年五月三十一日現在)とな
っています。この義援金は、全
額、日本赤十字社を通じて被災
地へ送金いたします。

引き続き皆様のご協力をお願
いします。
(総務課)

○震災関連死者とは

東日本大震災による負傷の悪
化等により亡くなられた方で、
災害弔慰金の支給等に関する法
律に基づき、当該災害弔慰金の
支給対象となった方です。

二〇一一年(平成二十三年)
三月十一日に発生した東日
本大震災では、警察庁緊急
災害警備本部の発表による
と、本年六月十日現在、死者
一万五千八百八十三人、行方不
明者二千六百七十六人にのぼ
り、また、復興庁の発表による
と、本年三月三十一日現在の震
災関連死者は二千六百八十八人、
本年六月六日現在の避難者は
二十九万八千人にのぼります。
未曾有の大災害となりました。
未曾有の大災害となったこの
震災からの復興には、今後も長
期的な支援が必要です。

広島市では、震災直後の
二〇一一年三月十四日から、
「東日本大震災義援金」の受付
を行っており、本財団では広島
平和記念資料館、国立広島原爆
死没者追悼平和祈念館、広島市
留学生会館、広島国際会議場に
募金箱を設置しています。



平和記念資料館を 全面的に リニューアル

広島平和記念資料館は、開館から今年で五十八年目を迎え、本館は老朽化が進んでおり、その保存を行う必要があります。また、戦争体験のない世代が多くを占めるようになった現在、被爆の実相をよりわかりやすく正確に伝えるために建物を改修し、展示を全面的に見直すこととなりました。リニューアルにあたっては市民の皆さんから意見をいただきながら、学識経験者や被爆者等から成る検討委員会での検討を経て二〇一〇年(平成二十二年)七月に策定した「広島平和記念資料館展示整備等基本計画」に基づいて進められています。現在、展示の設計が終了し、施設の改修との調整を行っています。

観覧動線が変わります

現在は、東館一階から入館し、ま

ず東館の展示を観覧した後、渡り廊下で本館へ移動し、本館の展示を観覧後、本館から退館するルートとなっています。来館者などへの調査を行ったところ、平均観覧時間は約四十五分で、うち本館の観覧時間は約十九分という結果が示されました。これは、館の中心をなす「被爆の実相」を伝える展示の観覧に十分な時間をかけられていないことを示しています。この課題を解消するため、リニューアル後は、東館一階から入館して新設するエスカレーターで直接三階へ上がり、導入展示を観覧後、すぐに渡り廊下で本館へ移動し、まず本館の展示を観覧できるようにしま



「導入展示」パノラマ模型

四つのテーマで展示

常設展示は、「導入展示」(東館三階)、「被爆の実相」(本館)、「核兵器の危険性」(東館三階)、「広島歩み」(東館二階)の四つのテーマに分かれ、展示構成や資料など展示内容が大幅に変わります。中でも本館の「被爆の実相」は当館の使命を果たすための中心的な展示テーマと位置付けています。

より人間の被害に重点

本館の「被爆の実相」展示は、原爆の非人道性、被害の甚大さや凄惨さ、被爆者や家族の苦しみ、悲しみなどをこれまで以上に伝えることとしています。展示は、大きく「八月六日のヒロシマ」と「被爆者」の二つのゾーンに分かれます。

「八月六日のヒロシマ」のゾーンでは、原爆の熱線、爆風、放射線が複雑に絡み合い都市と人に大きな被害を及ぼしたことを伝えます。一瞬にして壊滅した都市の中で多くの生命が失われたことを示すため、破壊されたレンガ壁など大型の被爆資料と亡くなった人たちが着用していた衣服、遺体や火傷を負った人たちの撮影した写真など、より多くの資料を合わせて、当時



本館「八月六日のヒロシマ」集合展示

の凄惨な状況がイメージできる集合展示を行います。

「被爆者」のゾーンでは「人」に主眼を置き、遺品と合わせて遺影や詳しい被爆状況、奇贈者の思いを展示し、一人一人の命の存在や遺族の悲しみなどを伝えます。また、健康被害や心の傷など今日まで続く原爆被害の実態を、被爆者の体験記も活用しながら展示します。

大型の情報検索装置

本館から再び東館へ戻ると、三階では「核兵器の危険性」、二階では「広島歩み」をテーマとする展示です。ここでは、来館者が関心を持ったテーマについて、より深く



「メディアテーブル」パース

調べられるよう、大型の情報検索装置である「メディアテーブル」を新たに設置します。「メディアテーブル」はタッチパネルで画面展開し、自分が知りたいさまざまな情報を入手することができます。

二〇一八年度(平成三十年)度 にグランドオープン

今年度から東館の改修工事に着手し、東館は二〇一五年度(平成二十七年)度まで、本館は二〇一六年度(平成二十八年)度、二〇一七年度(平成二十九年)度に改修工事を予定しています。工事期間中は、どちらか一方の館の展示は観覧できるようにします。東館、本館の二館を観覧できるグランドオープンは二〇一八年度(平成三十年)度の予定です。

(平和記念資料館 学芸課)